

「マーケットの浅読み・深読み」

発行・編集:FXニュースレター

執筆担当:斎藤登美夫



◆◆◆ No.0740 ◆◆◆

23/05/31

【 5 月ドル/円は月間変動復活、6 月も「大変動」を期待 】

まだ一日残しているものの、足もと5月ドル/円相場の月間変動幅はすでに7円を超えている。4月の相場は同 5.92 円と、決して小さい変動ではなかったけれど、それでも昨年 3 月以降続いてきた「月間変動幅平均 8 円」の「一」のパターンがついに潰えたかと思ったのだが、ホッと一息。今後の動静に一縷の望みが持てる値動きだ。明日からの 6 月相場にも引き続き「大きな価格変動」を期待したい。そうしたなかドル/円は昨年 11 月以来、半年ぶりの高値 140 円台を回復していることもあり、市場の一部からは「介入警戒感」なども徐々に取り沙汰は始めている感もある。

◎昨年の経験則からすると、当局介入の「要警戒ゾーン」に

今回の当レポートでは、月初恒例となっている過去の経験則から見た(6 月の)月間見通しを報じてみたい。

まずは恒例となっている月間の星取表から見てみると、6 月ドル/円相場の勝敗は 1990 年以降昨年までの 33 年間で 19 勝 14 敗だった。若干ドル高有利ではあるが、それでも勝率で 6 割未満。大きな特徴とは言えないようだ。

しかし、過去の 6 月相場には興味深いポイントが別途 2 つある。うちひとつは、「動くか動かないか、両極端になりやすい」傾向がうかがえること。今回は期待も込めて「動く」事例のみを挙げれば、1 カ月のあいだに 13 円以上も動いた 1998 年(高値 146.75 円、安値 133.60 円)になるだろうし、昨年も年間順位こそ 6 位と中位ながら、月間変動幅は 8.36 円となかなかの変動を記録していた。

もちろん、先で指摘したように、月間を通して「動かない」というケースも少なくはない。しかし、今年は 2 カ月連続の大相場。さらに言えば今年一番の月間変動を達成した 2 月 8.82 円を上回る値動きを個人的には期待している。

一方、6 月相場におけるもうひとつのポイントは、「一度方向性が示されると、そのパターンが続く傾向がうかがえる」こと。実際 2000 年以降でみてみると、2008 年までの 9 年間で 8 回が「5 月相場と同じ方向」に動いていたのだが、それ以降、2009 年以降 2018 年までの 10 年では 9 回が「逆方向」に動いていた。

翻って 2019 年から昨 2022 年までの 4 年中 3 回が「順張り」。つまり、5 月と 6 月が再び「同じ方向」へと動いていたのだが、今年は果たして!?

ちなみに、今年の 5 月相場はドル高・円安方向への動き。それを踏まえ、6 月が順張りとなると「ドルの続伸」が予想されるだけでなく、仮に「大きく動く」にあたると思えば、ドル/円は 145 円どころか 150 円に接近する可能性も決して有り得ない話ではない。6 月相場は予想以上のドル高進行もありうるのだろうか。

しかしながら、いささか気になるのは、日本の通貨当局による「円安けん制」の動き。たとえば、昨 30 日の東京タイムにも鈴木財務相から「為替の動きを引き続きウォッチしていく」、続けて神田財務官からも「為替市場の動向に適切に対応する」とした最初の一步、軽いジャブ程度ながら口先介入と思しきコメントが発せられていた。このあとも引き続きドルが強保ち合い推移などをたどった場合には、改めて口先介入が聞かれてもまったく不思議はなさそう。そして、さらなるドル高の進行に対し、一定の歯止めをかける可能性もある。

また思い起こしてみると、1998 年 6 月以来、24 年ぶりとなる政府・財務省が「円買い介入」を復活させたのは昨 2022 年 9 月 22 日だったわけだが、その際の介入レベルはザックリ 144-146 円とみられている。そんな昨年の経験則を参考にすれば、本稿執筆時に推移している 139-140 円で即座に当局の円買い介入が実施されるとまでは思われないが、「要警戒ゾーン」ともいえるレベルへと達しつつあると言えるのかもしれない。前述したように、まずは口先介入からだが、それでもドル高・円安が止まらなければ、昨年続き実弾介入が実施される可能性もゼロではないだろう。6 月相場は当局の市場介入含み。目の離せない展開となりそう。 (了)

